

亀山郁夫著

『ドストエフスキー——共苦する力』

東京外国語大学出版会 二〇〇九年四月

地下鉄サリン事件、九・一一事件、秋葉原無差別殺人事件……、どれも二〇世紀末から二一世紀初頭の間に起こった重大な事件であり、中でも九・一一事件は世界中を震撼させ、大きな歴史の転換点となった事件とも言えるだろう。現代に生きる私たちはこれらの事件を当然予期することもなく、これらの暴力に対して驚きおののいた。

さらに、グローバル化時代、インターネット社会、ボーダレス化……、これらも現代を象徴する、現代を映しだしていると言える言葉である。一昔前には少なくとも一般人にとつてはとも考え付かなかつた世界ではなからうか。たとえばインターネットが登場し始めていた十数年前であっても、今ある状態にまで進歩していくとはなかなか思いつかなかつただろう。

しかし、本書『ドストエフスキー——共苦する力』の序章において、ドストエフスキーの作品ではこれらのことが予見されていたことが著者によって言及されているのだ。

本書ではドストエフスキーの四つの作品を軸として、そこから現代に通ずる秘密のカギを紐解いていく。具体的に取り上げ

られている作品は、『罪と罰』、『白痴』、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』である。それらの作品の内容を深く読みつつ、その内容に関する様々な解釈や考えなどが著者独特の例えや言い回し、さらには時に実体験も交えながら語られていく。

本書はいわゆる横文字も幾分散見されたりと、とっつきにくい印象があるかもしれない。しかしながら、それに勝るのは著者特有の語り口調であろう。この独特の語り口調により、いつの間にか本書の内容に馴染み、引き込まれ、意外なほどあつという間に読了してしまうことになるだろう。私自身もそうだったが、妙に魅了されてしまうのだ。

当然、文体に限らず中身も興味深い。「ドストエフスキー」と題がうたれている本書において、ある意味非常に現代的ないくつかのキーワードをその冒頭でいきなり見つけることになる。ドストエフスキーは一九世紀のロシアに生きた人物であるわけだから、現代的なキーワードの数々にここで出くわすことはあまり想定されるものではない。しかし、ドストエフスキーの世界と現代の世界とが時に交差されつつ語られるので、ある場合においては読者にとつてより身近に感じられ、興味をそそるだろう。たとえば、「傲慢」などといった、九・一一事件などよりも我々に身近で日常的なテーマについてまで時には言及されていたりもする。またそれらがドストエフスキーの作品における深い内容とからめられており、次にはどのように展開されていくのかと、引き付けられる点が盛りだくさんな内容である。

また、ところどころでドストエフスキーの作品を読む上でのカギや様々な解釈の可能性も与えられている。それだけでも興

味深くわくわくとする。これまでに指摘された解釈の諸説なども簡潔に言及されており、読者はその比較もできて楽しい。まるで著者の敷いてくれたレールに沿いながら、作品の内容に迫りつつ、そこに読み取れるものを汽車に乗って追っていくような気分になり、とても楽しめるのだ。しかも、それが四つの作品にわたるわけであるから、汽車で四カ国の旅行をするのと同然なのだ。実に満足感抜群の旅である。

本書はドストエフスキーの作品が軸となつているので、やはりドストエフスキーを読んでからでない……、などと思いつめる必要は全くない。もちろん、翻訳でも一読している方がより話が分かりやすいということは言をまたない。しかし、繰り返すようだが、必ずしもその必要はない。むしろ本書を読むことでドストエフスキーの作品に多くの隠されたメッセージが潜んでいることを知り、そのことによつて読書に駆り立てられるのではないだろうか。実際、先ほども述べたように、作品を読み解くための様々なヒントや内容の多様な解釈が本書中に与えられているので、初めてあるいは改めてドストエフスキーの作品を読む際には、本書読了後であれば読みやすくなるはずである。その際には少なくとも、目で文章を追って終わるということではなく、必然的に頭でいろいろ考えながら読むようになるだろう。少しオーバーな表現かもしれないが、とりわけ今までドストエフスキーを敬遠してきた方にとつて、本書はドストエフスキー世界への招待状となり、また同時にそれらの作品を読み解くためのコンパスや地図となるだろう。

一読者としての正直な感想を最後に述べると、本書を読み終えた後、新たに得られた視点を持つてドストエフスキーの作品

をもう一度読み返してみたいと思うようになった。最初は、単に作品の内容や登場人物の視点にたつて物語を追うことしかできなかったが、本書で多種多様な視点や考え方を養った上で読むと、もつとドストエフスキーを楽しむことができるかもしれない。そんな期待を抱きつつ、当然のことながら、他でもない著者が翻訳した光文社古典新訳文庫版の『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』をまず手に取ろうと思う。

(菅井健太)